## 九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

## 陰陽の霊としての鬼神:朱子鬼神魂魄論への序章

柴田, 篤

https://doi.org/10.15017/2328503

出版情報:哲學年報. 50, pp.71-91, 1991-03-30. 九州大学文学部

バージョン: 権利関係:

# 陰陽の霊としての鬼神

----朱子鬼神魂魄論への序章--

柴田

篤

魂魄に関する思索は、彼の人間観を考えるにあたってきわめて重要な意味を持っているのではないだろうか。 全体像を探究するために看過することのできない課題であるといえる。今回取り上げる朱子の場合でも、その鬼神や に対して、その人がどのように考えていたかを掘り下げてみることが必要であろう。そのことは、それぞれの思想の 意味を持っていなかったということは、一概には言えない。生と死に関して、また人間の認識能力を超えたことがら ての論究がみられない、あるいは少ないからといって、そういった問題に対して無関心であったとか、大して重要な ると共に、人間の死あるいは死後をどう捉えるかということに深く関わっていたといえる。従って、直接鬼神につい れぞれに違いが見られるが、一般に鬼神は、天神・地祇・人鬼を含んだ概念であり、祭祀儀礼に直接関わる問題であ 古来、中国においては鬼神をめぐって様々な議論が展開されてきた。その存在の有無や対応の仕方に関しては、そ

と言うならば、巻三の鬼神は、その中間に位置しており、世界存在と人間存在の双方の問題に関わるものとして捉え 六は「性理」というようになっている。この中、巻一・二を「世界観・存在論」、巻四・五・六を「人間観・人性論」

例えば、『朱子語類』一四〇巻中、冒頭の基礎理論編の構成は、巻一・二は「理気」、巻三は「鬼神」、巻四・五

又、『語類』巻一四~九二に展開される経書解釈の中でも、鬼神に関する議論がしばしば登場している。このように『語 類』の構成を一瞥しても、鬼神に関する問題が朱子の思想体系全般に深く関わるテーマであることがわかる。 られているといえる。あるいは、世界と人間を包括する、結びつけるものとして鬼神がある、と見ることもできる。

て、彼の人間観や世界観を再検討する糸口を探ってみたいと思う。 する緻密な人生論が構築されているが、鬼神論との関係については、従来の研究においても今一つ明確にされていな を中心に考察していきたいと思う。なぜなら、朱子には性善説の基盤の上に、「心統性情」と「性即理」とを根幹と きるのではなかろうか。本稿では、朱子の発言や著述に即して、特に人間存在における鬼神としての「魂魄」の概念 手になる『朱子語類』の構成分類上から見られることがらであるが、朱子自身の思想においても同様のことが指摘で い点があるように思われるからである。以下、朱子の人間理解における鬼神魂魄概念の位置付けをはかることによっ 面と、死後の存在を含めた人間論の面という、両面から捉えられていることが窺われる。以上の点は、朱子の弟子の 考である。この分類からも、朱子の鬼神概念が、祭祀の対象となるものを指すと同時に、陰陽の造化という存在論の 鬼神」つまり陰陽の造化、「人における鬼神」つまり人が死んで鬼となるもの、「祭祀の鬼神」つまり天神・地祇・祖 巻首にある黄子毅「朱子語類門目」の「鬼神」の項では、次のように三つに大別している。すなわち、「天における ところで先に述べたように、そもそも鬼神という言葉には、様々な意味が含まれているといえるが、『朱子語類』

神説」、三浦國雄氏の「朱子鬼神論の輪郭」、錢穆氏の『朱子新学案』第一冊「朱子論鬼神」等がある。諸論を参考に(3) しながら、上記のような観点から考察を進めていくことにしたい。 朱子の鬼神論に関する専論としては、友枝龍太郎氏の『朱子の思想形成』第二章「存在の問題」第三節「鬼 また書簡の中で、次のように述べている。

=

先ず初めに、『論語』 の「敬鬼神而遠之」(雍也篇) と「子不語怪力乱神」 (述而篇)の語に対する朱子の註釈を見

てみよう。 人道として為すべきことに専ら力を注いで、 知ることのできない鬼神のことに惑わないのは、 知者の事である。(5)

怪異や勇力や悖乱の事は、正しい道理ではないから、もとより聖人が語ることではない。鬼神は造化の跡であり、 (論語集註・雍也篇

正しくないわけではない。しかし、十分に理を窮めないならば、明らかにしにくいものがある。だから軽々しく

人に語らなかったのである。(同上・述而篇)

このように朱子は、鬼神には不可知なる要素、明白にしがたい面があると説いている。 また、 『語類』

の冒頭で、次のように述べている。 に仕えることができよう。人生のことが解っていないのに、どうして死後のことが解ろう。」(先進篇)と言って 先ずは日常の切実なことに努力すればよい。孔子が「十分に人に仕えることができていないのに、どうして鬼神 いるが、ここに尽きる。つまり、理解すべきものが理解できれば、やがて鬼神のことは自然に解るのだ。もし理 鬼神のことは二番手にすることだ。あの影も形もないものは、理解しがたいものであり、理解する必要はない。

鬼神の道理は、聖人でも説きがたいものです。本当に一物が存在すると言うのは、もとよりよくないが、本当に 物が存在するのではないと言うのもよくない。もしはっきりと解らないなら、しばらく置いておくのがよいで

解すべきものを理解せずに、ひたすら緊要でないものを理解しようとすれば、やがて何も解らなくなってしまう。

## しょう。(朱子文集・巻五一・答董叔重)

ものだから、暫く置いておく方がよい。」という言い方から、直ちに朱子が鬼神の問題を重視しなかったとはいえな まり「知」と「不知」を明確に区別するという、孔子以来の考え方を継承するものといえる。従って、「説きにくい するものではない。『論語』先進篇の孔子の言葉を引用していることからも解るように、人と鬼神、人生と死後、つ をとり続けたということである。このことは、必ずしも彼が鬼神の問題に対して優柔不断であったということを意味 を行なっているわけであるが、鬼神が理解しがたく、説きがたいものであるということにおいては、終始慎重な態度 いのである。むしろ、そういった言い方の背後にあるものに注目しなければならないといえる。 ここで注意しておきたいことは、以下に見るように、朱子は鬼神の問題に関しても「窮理」の対象として分析解明

さて、鬼神に関する朱子の概念定義は、『中庸章句』第一六章に見える。

伸びるものは神であり、反りて帰るものは鬼である。その実、一物に他ならない。(๑) が思うに、二気という点から言えば、鬼は陰の霊であり、神は陽の霊である。一気という点から言えば、至りて 程子は「鬼神は天地の功用、造化の跡である。」と云い、張子は「鬼神は二気の良能である。」と云っている。私

に「鬼神は陰陽の消長に他ならない。」(巻三―6)とか、「鬼神は気に他ならない。屈伸往来するものは気である。」 あるとストレートに言わず、「陰の霊」「陽の霊」と説いている点に注意しておきたい。明初の朱子学者である薛敬軒 (巻三―7)とかあるのは、そうした考え方を踏襲するものと言える。ただ『中庸章句』では、鬼神は陰陽の二気で このように朱子は、程子や張子の説を承けながら、鬼神を陰陽二気の作用・現象として捉えている。『朱子語類』

鬼神は二気の霊である。(読書続録・巻二)

(瑄)は、次のように言っている。

鬼は屈であり、神は伸である。屈伸は陰陽の霊なるところである。(同上・巻一〇)(3)

このように、薛敬軒は二気の霊として鬼神を捉えているが、更に次のようにも述べている。 鬼神は天地における陰陽の霊であり、魂魄は人身における陰陽の霊である。(同上・巻一二)

魂魄については、朱子自身、次のように言っている。

られるが、 天に昇り、 中国の人々が死と死後の問題を論ずる際に、しばしば登場する概念であり、文献によって内容表現に若干の違いも見 われるように、精神的・理知的要素を担う。また、魄は鬼と、魂は神と、概念的に結びつく。陰陽で言えば、魂は陽 先に述べたように、 魄は陰である。朱子は、こういった伝統的な解釈を踏まえながら、次のように述べている。⑵ 鬼神は天地の間の一気に通じて言い、魂魄は人身を主として言う。(朱子文集・巻四四・答梁文叔)[5] 概ね次のようなことが言えよう。人は魂と魄が合わさった存在であり、死ぬと、魂と魄とが分離し、魂は(エタ) 魄は地に降る。魄は、形魄・体魄と言われるように、肉体的・形体的要素を持ち、魂は、 鬼神は様々な内容を含むが、魂魄は人間のみに適用されるものである。そもそも魂魄は、 魂気・知気と言

人が生まれる時、魂と魄は交わりあい、死ねば離れてそれぞれ散去する。魂は陽であって上に散じ、魄は陰であっ (朱子語類・巻八七・祭義―5)

の良能」と言ったのである。(同上―6) 魄は形の神で、魂は気の神である。魂魄は神と気の精英であるから、霊というのである。だから、 張子は「二気

陰の霊、 遡れば、 いえる。これは、『説文解字』第九上の「魂、陽気也。」「魄、陰神也。」という説とも重なる。つまり、 「形の霊なるものを名づけて魄という。」「気の神なるものを名づけて魂という。」とあるのを踏まえたものといえる。 ここで朱子が「魄は形の神で、 神は陽の霊」という定義は、表現上は以上のような伝統的解釈を踏襲したものといえる。そのことは、『語類』 『淮南子』 精神訓の高誘注に見える「魄は陰の神である。魂は陽の神である。」という解釈に基づくものと(a) 魂は気の神である。」と言っているのは、『春秋左氏伝』 昭公七年の孔頴達の正義に 朱子の

+ 7

が、それはなぜか。朱子自身が言うように、「二気」の作用であることが「分明」に説かれていることにもよるが、 う性格を最も明確に言い表わしていると考えたからとも言える。つまり、「鬼は陰の霊、神は陽の霊」という定義には 先の引用からもわかるように、「二気の良能」という表現こそ鬼神魂魄が「気の精英」であり、「気の霊」であるとい 張横渠の「鬼神は二気の良能である。」の方がより的確な表現であると説いている(同上・巻六三・中庸一六章―19) 単に伝統的鬼神観を踏まえただけのものと言えるかどうか。朱子は、程伊川の「鬼神は造化の跡である。」よりも、 の中で自ら高誘注を引いていることからも解る(朱子語類・巻三―19)。しかし、だからといって朱子の鬼神解釈は

Ξ

やはり彼なりに特別な意味が込められていたと見るべきであろう。そのことを更に検討していきたい。

朱子は性と魄魂の関係について、次のように述べている。

魂魄で、知覚のあるものは、皆気によるものである。だから、聚まれば有り、散ずれば無くなる。理となると、 性は理に他ならない。聚散するとは言えない。聚まると生じ、散じると死ぬものは、気に他ならない。所謂精神 もともと聚散によって有ったり無かったりするものではない。…(中略)…鬼神は精神魂魄である。程子の云う 「天地の功用」、張子の云う「二気の良能」は、いづれも性のことを言ったものでない。(朱子文集・巻四五・答

廖子晦)

なる。だとすると、問題になるのは、宗廟の祭祀において祖霊が来格し、子孫がそれに感格することがあり得るかと るのである。このような言い方を見るかぎりでは、人が死ぬと陰陽の気は分散消滅し、魂魄も散滅してしまうことに いうことである。鬼神を気の姿として捉える時、祖霊の祭祀と矛盾しないかどうかということである。朱子は、この このように、気の聚散によって存滅する精神魂魄知覚と、聚散することのない理である性とは明確に区別されてい

問題に対して次のように答えている。

存在するからである。(朱子語類・巻三―52) 無くなってしまったかのように見える。誠敬を尽くすことができれば感格するというのは、理が常にしっかりと 尽くせば、祖考の魂魄を招くことができる。このことは、もとより説き難いことだ。散じてしまうと、すっかり 精神魂魄は散じてしまっても、子孫の精神魂魄にはもとより連続したところがある。だから、祭祀の礼で誠敬を となる。しかし、その気が散じてしまっても、天地陰陽の理というものは生生として窮まることがない。祖考の 天地陰陽の気というものがあるだけで、人も万物もすべてこの気を受ける。気が聚まれば人となり、散ずれば鬼

と解釈している。この場合、誠は「実理」の実と同義と考えてよい。陰陽の合散、つまり鬼神は実理に適ったことな 掩如此夫。」という句で結ばれるが、朱子は「誠は真実無妄のことである。陰陽の合散は、真実でないものはない。」(※) のない理が存在するからである。もう一度、『中庸章句』第一六章に戻ってみよう。この章は、「夫微之顕、誠之不可 のである。また、次のようにも述べている。 このように朱子は、魂魄は気だから人が死ぬと散亡してしまう、とは考えていないのである。そこに聚散すること

無いものはない。だから、このように掩うことができないほど昭昭と発現するのである。(朱子語類・巻六三・ 鬼神は気を主として言ったもので、形而下のものに他ならない。ただ物に対して言えば、鬼神は気を主として物 である。誠は実である。鬼神は実有のもので、屈するのは実に屈し、伸びるのは実に伸びる。屈伸合散は、実で の体となり、物は形を主として気を待って生ず。思うに、鬼神は気の精英で、所謂「誠の掩うべからざる」もの

このように、「誠之不可掩」は鬼神が実有することを説いたもの、と解釈される。更に、次のように説いている。 誠は実然の理であり、鬼神も実理に他ならない。もしこの理がなければ、鬼神も存在しない。(同上―28)

その意味で鬼神は実理に他ならないとも言えるのである。朱子は次のように言っている。 以上のように見てくるならば、魂魄は二気が往来屈伸する作用であるが、そこには理が厳然と存在したのであり、

配するものではない、ということを説いたもので、だから「良能」と言ったのだ。(同上―18) 「鬼神は二気の良能である。」(と、張子は述べているが、)これは、(気の)往来屈伸は理の自然であり、作為按

神を捉えていると言える。つまり、繰り返して言えば、「二気の良能」「陰陽の霊」という鬼神の定義には、理気の統 ずるならば、鬼神の実在が説明できなくなるというのである。朱子はあくまでも気と理を兼ね合わせたものとして鬼 捉えようとする意見に対して、「きみの言う通りだと、鬼神は存在しないことになる。鬼神は確かに理から説明するが、 合体としての鬼神の姿が説かれていたと考えられるのである。 しかし、気が無いと言うことはできない。」と忠告している(朱子語類・巻八七・祭義―16)。理の面からだけで論(゚゚゚) 陽の霊」という言い方で表現しようとしたともいえる。ところで朱子は、鬼神禍福吉凶のことを徹底して理でもって 意味を読み取っていたのであるから、鬼神は単に陰陽二気の作用だけでなく、そこに理が存在するということを、「陰 表現されている、というのである。とすると、前節で見たように、朱子は「良能」という言葉の中に「陰陽の霊」の このように、二気の運動は聚散することのない理に支えられているのであり、その理の自然なる働きが「良能」と

には、理を離れた気だけの存在もなければ、気を離れた理だけの存在もない」(朱子語類・巻一―6)のであり、万(゚゚) 物を造化する働きは陰陽五行であるが、理があってこそ気の働きがあるのである。 ところで、理と気の統合によって事物が成立するというのは、朱子の存在論における普遍的原理といえる。「天下

る。(大学或問) ある。周子の(『太極図説』に)所謂「無極の真、二五の精、妙合して凝る」とは、正にこれを言ったものであ 人や物が生ずる際、必ず理を得てこそ健順仁義礼智の性となり、必ず気を得てこそ魂魄五臓百骸の身となるので

この理と気の先後関係は極めて微妙なものがあると言える。朱子は、「理があってこそ、気があるのでしょうか。」と 理は存在の原理・規範であり、形而上の道であるから、「必ず理があってこそ気がある。」(同上)とされる。しかし、

いう質問に答えて、次のように言っている。

理は落ち着き所が無い。(朱子語類・巻一―11) これは本来、先後が言えるものではない。しかし、よって来る所を推し究めようとすれば、先に理があると説か なければならない。しかし、理が別に一物としてあるわけではなく、気の中に存在するのである。気が無ければ、

また、理先気後の説に対する質問に、次のように答えている。

だ、気が凝聚するところには、理もその中にある。…(中略)…ただ気があれば、理は必ずその中にある。(同 理も存在する。思うに、気は凝結造作することができるが、理の方は情意もなく、計度造作することもない。た ちらも推し究めることはできない。しかし、推測するに、恐らく気は理によって運行する。気が集まるときには、 このように説くべきではない。直ちに理があってこそ気があるのか、理はあとで気が先なのかを知ることは、ど

は『太極図説』の「無極之真、二五之精、妙合而凝。」の句を説明して、次のように言っている。 このように、理と気の関係は、一概に先後を言うことができないものがあり、両者は混融しているといえる。朱子

融している理由である。所謂「妙合」というものである。「真」とは理から言ったもので、無妄のことである。「精」 そもそも天下には性を離れて物は存在しないし、性が存在しないものはない。これが、無極と二五が隔てなく混

とは気から言ったもので、不二のことである。(太極図説解)

引いた『大学或問』に「必ず気を得てこそ、魂魄五臓百骸の身となるのである。」とあったように、魂魄は確かに陰 以上のように、朱子の存在論における理気の妙合という性格を考えてくるならば、次のことが言えるだろう。先に

魂魄に関する考え方を、単純に「気による解釈である」と捉えることには、やはり問題があるといえよう。 (3) 陽の二気によるものであるが、魂魄も実有のものである以上、理気の混融・妙合という性格を備えているのである。 「二気の良能」「陰陽の霊」という表現で鬼神魂魄が捉えられた理由はここにあったのである。従って、朱子の鬼神

### ᄱ

例えば、人心と道心を論じる場合にも、朱子は次のように言っている。 て捉えられている。「知覚」は、朱子学では心性論の範疇に属する概念であり、「心」が保有する重要な機能である。 のは、皆気によるものである。」(朱子文集・巻四五・答廖子晦)とあったように、魂魄は知覚の働きを持つものとし さて、次に考えるべきことは、魂魄の内容・作用である。前節で引用した中に、「所謂精神魂魄で、知覚のあるも

より生じるものがあり、知覚をなす根本が異なっているからである。(中庸章句序)(3) 心の虚霊なる知覚は同一であるが、人心と道心の違いが生じるのは、形気の私より生じるものと、性命の正しき

朱子が知覚と言う場合には、身体的諸感覚の機能から条理規範の認識に至るまでを広く含むが、次のようにも述べ

知覚されるものは心の理である。知覚することができるのは気の霊である。(同上・巻五―26)(33)(38) 知覚されるものは理である。理は知覚を離れないし、知覚は理を離れない。(朱子語類・巻五―4)

を知覚する働きを、「心の虚霊」あるいは「気の霊」と説いている。ここですぐに思い出されるのは、『大学章句』格

理は心が知覚認識する対象であるが、心と理は本来貫通するものである、と捉えられている。更に朱子は、心が理

思うに、人心の霊には、知が備わっていないものはないし、天下の事物には、理が備わっていないものはない。

物補伝中の次の言葉である。

ただ、理に関して十分に窮めていないところがある。だから知が窮められていないことがある。

なのですか、それとも気の働きであるのですか。」という質問に答えて、次のように説いている。 いる。この場合、 このように、天下の事物が具有している理を究明し認識する作用は、心の霊妙なる働き(人心の霊) 知覚する能力は何に依るのかが問題になる。朱子は、「知覚は心の霊妙な働きとして本来このよう と見なされて

によって、盛んに燃え上がるようなものだ。(朱子語類・巻五―23) 気だけの働きによるものではなく、先ず知覚するという理があるのだ。理は知覚の働きはしないが、 て形体をなし、理と気が合わさることによって、知覚することができるのだ。例えば、この燈が、油を得ること

という事実そのものを表した言葉だと言えよう。生成生存の根源に横たわる究極の事実であり、 に他ならない。性ではない。性は理に他ならない。」と答えている(同上―22)。このように朱子においては、性は心(45 あるのですか。」という問いに対して、「気の中には自らから霊なるものがそなわっているのだ。」と答えている ではなかった。朱子は次のように語っている。 や言語では推し窮めがたいものとして存在したのである。しかし、それはある固定的実体としてそこに存在するもの に内在する理であって、霊なるものではない。「霊」とは万物の生成要素である気に、存在原理たる天理が内在する よるものであった。朱子は、「霊なるところは心ですか、それとも性ですか。」という問いに、「霊なるところは、心 上―37)。このように、知覚作用は理気の妙合によるものであるが、それは気の中において理が働くという霊妙性に 耳で聞き、目で見、手で持ち、足で踏むのは、気の及ばない所のようですが、気の働きには、これを主宰するものが 心の霊妙な働きである知覚は、理と気が合わさることによって初めて可能なのである。朱子はまた、「心で思い、 しかも、 人間の認識

りする根源は、その心であるから、〔心には〕形象などあり得ようか。しかし、耳で聴き目で視るのだから、や 虚霊はもとより心の本体であり、自分で虚にすることができるのではない。耳で聴き目で視るが、視たり聴いた

はり形象があるのだ。心の虚霊には、どうして一物などありえよう。(同上―38)(『

ずから霊である。」(同上―40)と言っているが、心はそれ自体に理を保有するが故に、言い換えれば理と合一するが のである。 故に、事物の理を知覚認識する働きを持つのである。それが、「心の虚霊」「人心の霊」「気の霊」と呼ばれるものな 覚こそ、心の本質(本体)をなすものといえる。朱子は、「心は性に比べれば、やや形跡があるが、気に比べれば自 (霊)とは、心の本来の姿であって、霊なる実体が別に存在するわけではない。話を元に戻せば、虚霊なる知

そのことを考える前に、鬼神祭祀の問題について触れておきたい。 について捉えたものといえよう。ではそのことは、朱子の人間観を見る上で、どのような意味を持つのであろうか。 おける心の霊妙な作用という面と、死後を含めた気の霊妙な働きという面の双方から、人間存在の最も根源的な要素 は死後も存在するものではない。気が散亡することによって、知覚作用は消滅するのである。知覚と魂魄は、生時に であると説かれるのである。魂魄は知覚機能を支える基体として存在するとも言える。しかし、魂魄と異なり、知覚 魂魄は、以上のような虚霊なる知覚を作用として持つ。だから、魂魄も知覚も共に、理と気が妙合した「気の霊」

### 五

第三節で引用したが、朱子は、死によって気が散亡しても、祖考の魂魄と感格することは可能だと考えた。 祖考の精神魂魄は散じてしまっても、子孫の精神魂魄にはもとより連続したところがある。だから、祭祀の礼で りと存在するからである。(朱子語類・三―52) かり無くなってしまったかのように見える。誠敬を尽くすことができれば感格するというのは、理が常にしっか 誠敬を尽くせば、祖考の魂魄を招くことができる。このことは、もとより説き難いことだ。散じてしまうと、すっ

に、次のような問答が見える。 り立つためには、自他万物を貫く天理の実在と、その天理に対する誠実さとが前提にされているといえる。『朱子語類』 祖考と自己の間における理の公共普遍性を確信し、これに従う姿勢のことである。つまり、祖考の魂魄との感格が成 を尽くす」というのは、祖考を祀るという行為が自己の中で真実純粋なものとしておこなわれるということであり、 に誠実であるかということである。言い換えれば、他者との関係において、自己の心をあるべきあり方(天理)に対 ができなければ、決して鬼神に仕えることはできない。」とあるように、「誠敬を尽くす」ことは、他者に対していか(45) 持することである。『論語』(先進篇)の「未能事人、焉能事鬼。」に施された集註で、「誠敬によって人に仕えること 可能だということである。「誠敬を尽くす」とは、心を真実無妄なものにして、対象に対して純粋専一であるよう保 して純一化することである。これは、朱子の功夫論で言えば、居敬の範疇に属するものといえる。「祭祀の礼で誠敬 ここで重要なのは、子孫と祖考の魂魄との交感は、子孫が祭祀の礼において「誠敬を尽くす」ことによって始めて

気をここに招き集めることができる。このことは説明しにくい。人が自分で理解しさえすればよいのだ。」(朱子(紫) 同じだ。(死ぬと) その気は直ちに散じてしまうが、その根はやはり確かに存在する。根が存在する以上、その 後の水は前の水ではなく、後の波は前の波ではないが、同じ水の波に他ならない。子孫の気と祖考の気もこれと 彼の根はやはり確かに存在する。誠敬を尽くせば、彼の気をここに招き集めることができる。水の波と同様で、 祀を行い、感格するのはなぜですか。」(答えて)言う、「結局、子孫は祖先の気である。祖先の気が散じても、 問う、「人が死ぬ時、魂魄は直ちに散じるのですか。」(答えて)言う、「もとより散じる。」また問う、「子孫が祭

魂魄が来格し、子孫がこれに感格することができるのは、窮まることのない天地陰陽の理が魂魄の中に内在するから ここで朱子が言っている「根」とは、聚散することのない理の存在を示唆したものといえる。このように、

魂魄の本質を見ていたといえよう。そして、このことは、世界と人間に対する朱子の根本的な見方に関わっていたの と表現されたものに他ならなかった。このように見てくるならば、朱子は「説き難い」と言っている所にこそ、鬼神 で、朱子はいずれにおいても、「このことは説き難い。」と述べている。鬼神魂魄の持つ霊妙性、これが「陰陽の霊 にその理気妙合という魂魄の霊妙性が現われたものと見ることができよう。以上、祖考の魂魄との感格を説明した中 である、と考えられているが、これは、祖霊の祭祀を根拠づける為にむりやり理の概念を持ち出してきたというもの ではない。既に見てきたように、鬼神魂魄は本来理気の妙合という性質を持っているのであるから、来格感格は、正

の根本である。」と定義づけている。敬はなぜ「一心の主宰」であるのか。朱子は『語類』の中で敬を説明して、「自 粛」、謝上蔡の「常惺惺」、尹和靖の「其心収斂、不容一物」等の語を引用しながら、「敬は一心の主宰であり、万事 れた。朱子は『大学或問』の中で「敬の一字は聖学の終始を貫くものである。」として、程子の「主一無適」「整齊厳(sc) 上―18)とあるように、居敬と窮理は、人の両足(同上)、車の両輪、鳥の両翼(同上―16)のようなものと見なさ 窮理がうまくいけば、居敬の功夫も日々に益々進むし、居敬がうまくいけば、窮理の功夫も日々に益々密になる。」(同 である。」(朱子語類・巻九―20)、「学ぶ者の功夫は、居敬と窮理の二事にあるだけだ。この二事は互いに発し合う。(4) らないが、窮理(格物致知)の功夫は、常に居敬の功夫を必要とする。「主敬と窮理は両端であるが、実は本は一つ 為が天理に合致するよう努めていくことが重要であると見なされた。理に順うためには、理を明らかにしなければな ぶ者はこの四字を守らなければならない。」(朱子語類・巻八―邸)と言っているように、心を虚明にして、自らの行 ではないだろうか。前節で見た、知覚と魂魄との関係に話を戻して、この問題を更に考えてみることにしたい。 朱子の考える学問の中心は、天理の窮明とその実現にあるといえる。「『虚心順理』(心を虚明にして理に順う)、学

は窮理の実際面からも言えるのである。 こか明白でないものに対して、にもかかわらず謹み従う態度を表わしたものといえる。つまり、天理を窮め明らかに なく、天理に対して畏敬の態度をとるということである。なぜそこに畏れの心が生じるのか。そもそも畏敬とは、ど 心は自ら主宰となり、天理は明らかになるというのである。ここで注意すべきことは、敬はただ心を収斂するのでは とも言っている。敬は、単に塊然と兀坐するのではなく、畏謹ところがあって放縦にならないことである(同上・巻 に、心を引き締めて天理に純一化することであり、朱子はまた「敬は『畏』の字に他ならない。」(同上・巻一二―9) にする」こと(同上・巻一二―71)、と述べている。「精神の収拾」、「身心の収斂」とは、形式面で我身を慎むと同時 己の精神をしっかりと収拾する」こと(朱子語類・巻一二―6)、「身心を収斂して、整齊純一にし、放縦でないよう しようとする主体(心)にとって、天理そのものは本質的に未だ明らかならざる要素を持つものであった。そのこと 一二―9)。以上を要するに、敬は心を純一にし、天理に対して畏敬の姿勢を保持することであり、そのことによって、

理の体現とが、どのようにして結ばれるかということは、言葉によっては説明できないものなのである。 上明確に示されているとは言えない。つまり、個別的に実理の認識を積み重ねることと、豁然貫通という究極的な天 積累の結果として、豁然貫通なる状態が想定されているのではあるが、「 | 旦」の意味するものについては、それ以 そこにおいて、「衆物の表裏精粗にすべて到り、吾が心の全体大用がすっかり明らかになる」のである。格物致知の ものはない。」とあるように、万物の理とそれに対する心の知覚を前提にして、格物致知は成り立っている。格物致 知は具体的な事物に即して、その理を窮めることであり、その積み重ねの果てに、「一旦豁然貫通する」状態があり、 『大学章句』格物補伝に、「人心の霊には知が備わっていないものはないし、天下の事物には理が備わっていない

功夫においても、天理の持つ不可知なる性格というものが顔を覗かせていると言える。天理が明白なものであること、 以上のように考えるならば、心に内具する知の働きを窮める格物窮理の功夫においても、またそれを支える居敬の

と呼ばれ、しかも天理にたいする「畏敬」感情が必要とされたのは、そのためといえる。 の場において、つまり気との「妙合」において現在するものだからである。理を認識する働きである知が「心の霊」 にとって不可思議なる要素をもつ存在といえる。なぜなら、理は単独に理それ自体として存在するのではなく、現実 かかる実理の内在として、性を実なるものとして心の中に位置付けたのである。しかし、究極の所、理は人間の認識 を持つとはいっても、それは実理としての実在性、安定性、権威性といったものを揺るがすものではない。朱子は、 というように、性として心に内在する理は、それ自体はあくまでも実なるものである。従って、理が不可知なる性格 性はもとより区別がある。霊なるものは心であり、実なるものは性である。」(朱子語類・巻16・大学・伝五章―1) 格を考えていたわけではないようである。言うまでもなく、朱子においては、性が心の中核に存在しており、「心と また認識可能であるということは、あたかも自明のことのようではあるが、朱子はそれほど単純に理というものの性

つ不可説性とも繋がるのである。(58) も重なる。そのことは、 ない。天理が単に「所当然の則」だけでなく、「所以然の故」つまり存在の究極的意味をも含むものであったことと これは理気の妙合としての「心」の本質に関わる問題であり、存在そのものの持つ不可知性にまで行き着かざるをえ 互いに密接に繋がりあう関係にあると見ることができる。人はなぜ天理を「知る」(認識する)ことができるのか、 おける祭祀の対象ともなる魂魄(鬼神)の問題とは、幽明、知不知と、いかにも対極に位置するかのようではあるが、 ることの意味がかなりはっきりしてきたといえる。生時において現実存在を認識把捉する格物致知の働きと、死後に このように見てくると、知覚とその知覚作用を支えるものとしての魂魄の両者が、「気の霊」として捉えられてい 裏返せば、 魂魄―死生を貫く人間存在の持つ不可思議性、あるいは鬼神といわれるものの持

ある、人間及び存在そのものに対する根本的な思惟を捉えなおすことができるのではないだろうか。 注目して見ていくならば、少なくとも朱子自身の思想体系においては、論理的矛盾や破綻を招来するという言い方だ けでは片付かないものがあったと言える。むしろ、陰陽の霊という鬼神の性格を考えていく時、朱子の思想の根底に かし、本稿において試みてきたように、陰陽の霊という表現、すなわち理気の妙合としての鬼神魂魄という考え方に 来しており、祭祀の問題に至って、朱子の合理主義的鬼神解釈は後退を余儀なくされている、というものである。 すを免れず、言い逃れを行なっている、と説かれることも多かった。つまり、朱子の気による鬼神論は論理的破綻を 従来、朱子の鬼神論は、往々にして陰陽二気による鬼神解釈と見なされ、その故に宗廟の祭祀に関しては矛盾を来

か。こういった問題に関しては、また別の機会にその検討を譲ることとしたい。 子の鬼神論の全体像、及びその倫理説との関係等については触れなかった。また、宋代の先行する思想家や同時代の 人々の鬼神観とどのような関係が見られるのか。更に、朱子の鬼神魂魄観はその後いかなる道をたどることになった 朱子の鬼神魂魄論を考察するに当たって、今回は魂魄の面、また特に陰陽の霊という点に絞って検討してきた。朱

## 註

- (1) 其別有三。在天之鬼神、陰陽造化是也。在人之鬼神、人死爲鬼是也。祭祀之鬼神、神示、祖考是也。三者雖異、其所以爲鬼神者 則同。知其異、又知其同、斯可以語鬼神之道矣。故合爲一卷。
- (2) 友枝龍太郎著『朱子の思想形成』(改訂版) (一九七九年、春秋社刊)。
- 3 第三七巻所収) も参照 『神観念の比較文化論的研究』(一九八一年、講談社刊)所収。また、「朱子鬼神論補」(一九八五年、 大阪市立大学『人文研究』

- 4 第六章、「形神、 | 錢穆著『朱子新学案』(一九七一年、三民書局刊)。その他、張立文著『朱熹思想研究』(一九八一年、 魂魄、 鬼神学説」等も参照。 中国社会科学出版社刊
- 5 専用力於人道之所宜、而不惑於鬼神之不可知、知者之事也。
- 6 怪異勇力悖乱之事、非理之正、固聖人所不語。鬼神造化之迹、雖非不正、然非窮理之至、有未易明者。 故亦不軽以語人也
- 7 死。此説盡了。此便是合理会底理会得、将間鬼神自有見処。若合理会底不理会、只管去理会没緊要底、将間都没理会了。 鬼神事自是第二著。那箇無形影、是雖理会底、未消去理会、且就日用緊切処做工夫。子曰、未能事人、焉能事鬼。未知生、 焉知
- 8 鬼神之理、聖人盖難言之。謂真有一物、固不可。謂非真有一物、亦不可。若未能晄然見得、且闕之可也。
- 9 気言、則至而伸者為神、反而帰者為鬼。其実一物而已。 程子曰、鬼神天地之功用而造化之迹也。張子曰、鬼神者二気之良能也。愚謂、以二気言、則鬼者陰之霊也、 神者陽之霊也。 以一
- 10 鬼神不過陰陽消長而已。
- 11 鬼神只是気。屈伸往来者、気也。
- 12 鬼神是二気之霊。
- 13 鬼者屈也。神者伸也。屈伸是陰陽之霊処。
- 14 鬼神者、天地陰陽之霊。魂魄者、人身陰陽之霊。
- 15 鬼神、通天地間一気而言。魂魄、主於人身而言。
- 16 鬼之盛也。……」、『春秋左氏伝』昭公七年の伝に「人生始化曰魄、既生魄、 『礼記』郊特牲篇に「魂気帰于天、形魄帰于地。」、礼運篇に「体魄則降、知気在天。」、祭義篇に「気也者、 陽曰魂。」等とあるによる。 神之盛也。
- 17 魂と魄それぞれの作用に関する朱子の見解については、前掲三浦論文に詳しい考証があるので、参照。
- 18 人生時魂魄相交、死則離而各散去、魂為陽而散上、魄為陰而降下。
- 魄者、形之神、魂者、気之神。魂魄是神気之精英、

謂之霊。故張子曰、二気之良能。

20 形之霊者、名之曰魄。…気之神者、名之曰魂。 19

- 21 陰之神。魂、陽之神。
- 22 伊川謂鬼神者造化之跡、却不如横渠所謂二気之良能。…張子之説、 分明便見有箇陰陽在。
- 性只是理。不可以聚散言。其聚而生、散而死者、気而已矣。所謂精神魂魄、有知有覚者、皆気之所為也。故聚則有、

名也。

24 理則初不為聚散而有無也。…鬼神便是精神魂魄。程子所謂天地之功用、 魄雖已散、 只是這箇天地陰陽之気、 而子孫之精神魂魄自有些小相属。故祭祀之礼尽其誠敬、便可以致得祖考之魂魄。這箇自是難説。看既散後、 人与萬物皆得之。気聚則爲人、散則爲鬼。然其気雖已散、逭箇天地陰陽之理生生而不窮。祖考之精神魂 造化之迹、張子所謂二気之良能、皆非性之謂也 一似都無了。

能尽其誠敬、 便有感格、亦縁是理常只在這裏也。

- 25 誠者真実無妄之謂。 陰陽之合散、無非実者。
- 26 可掩者。誠、実也。言鬼神是実有者、屈是実屈、 鬼神主乎気而言、只是形而下者。但対物而言、 伸是実伸。屈伸合散、 則鬼神主乎気、爲物之体。物主乎形、 無非実者、 故其発見昭昭不可掩如此。 待気而生。蓋鬼神是気之精英、 所謂誠之不
- 27 誠是実然之理、 鬼神亦只是実理。 若無這理、 則便無鬼神。
- 28 鬼神者、二気之良能、是説往来屈伸乃理之自然、非有安排布置。 故曰良能也。
- 29 如子所論、 是無鬼神也。 鬼神固是以理言、 然亦不可謂無気。
- 30 天下未有無理之気、亦未有無気之理。

31

人物之生、

必得是理、

然後有以為健順仁義礼智之性。

必得是気、

然後有以為魂魄五臟百骸之身。

周子所謂無極之眞、二五之精、

是気之中。無是気、

則是理亦無掛搭処。

- 32 妙合而凝者、正謂是也。 或問、必有是理、然後有是気、如何。曰、 此本無先後之可言。然必欲推其所従来、則須説先有是理。然理又非別為一物、 即存乎
- 33 或問先有理後有気之説。曰、 則疑此気是依傍這理行。及此気之聚、 不消如此説。而今知得他合下是先有理、 則理亦在焉。 蓋気則能凝結造作、 後有気邪、 理却無情意、 後有理、 無計度、 先有気邪、 無造作。只此気凝聚処、 皆不可得而推究。 然以意度 理便在
- 34 其中。…但有此気、 夫天下無性外之物、 則理便在其中。 而性無不在。此無極二五之所以混融而無間者也。所謂妙合者也。真以理言、 無妄之謂也。精以気言、不二之
- 35 の霊」という表現に注目している。慧眼というべきであろう。 「朱子ノ霊ノ字ヲ云ハレタ所ニ眼ヲツクベシ」「朱子ノ霊ノ字ヲ云ハレタルハ扨々味アルコトナリ」と、特に朱子の「陰の霊」「陽 崎門の佐藤直方は、朱子の鬼神に関する言葉を集めて、『鬼神集説』を刊行しているが、「中庸鬼神大意」(『韞蔵録』巻四) の中 鬼神を論じるには、「理ヲ主トシテ云」と「気ヲ主トシテ云」の双方が必要であることを強調している。また、この文の中で、

- 36 心之虚霊知覚一而已矣、而以為有人心道心之異者、 則以其或生於形気之私、或原於性命之正、而所以為知覚者不同。
- (37) 所知覚者是理。理不離知覚、知覚不離理。
- (38) 所覚者、心之理也、能覚者、気之霊也。
- 39 蓋人心之霊、莫不有知、而天下之物、莫不有理。惟於理有未窮。故其知有不尽也。
- 40 火、是因得這脂膏、便有許多光焰。 知覚是心之霊固如此、抑気之為邪。曰、不専是気、是先有知覚之理。理未知覚、気聚成形、理与気合、便能知覚。譬如這燭
- 41 心之所思、耳之所聴、目之所視、手之持、足之履、似非気之所能到。気之所運、必有以主之者。曰、 気中自有箇霊底物事。
- (42) 問、霊処是心、抑是性。曰、霊処只是心、不是性。性只是理。
- 43 虚霊自是心之本体、非我所能虚也。耳目之視聴、 何嘗有物。 所以視聴者即其心也。 豈有形象。然有耳目以視聴之、 則猶有形象也。若心之虚
- (4) 心比性、則微有迹。比気、則自然又霊。
- (45) 非誠敬足以事人、則必不能事神。
- 却在這裏。尽其誠敬、則亦能呼召得他気聚在此。 亦是如此。他那箇当下自散了、然他根却在這裏。根既在此、又却能引聚得他那気在此。此事難説、只要人自看得。 問、人之死也、不知魂魄便散否。曰、 固是散。 如水波様、後水非前水、後波非前波、 又問、子孫祭祀、却有感格者、 如何。曰、畢竟子孫是祖先之気。他気雖散、 然却通只是一水波。子孫之気与祖考之気
- (47) 虚心順理、学者当守此四字。
- (48) 主敬窮理雖二端、其実一本。
- 49 行、則右足止、右足行、則左足止。 学者工夫、唯在居敬。窮理二事。 此二事互相発。 能窮理、 則居敬工夫日益進。 能居敬、 則窮理工夫日益密。譬如人之両足、左足
- (5) 敬之一字、聖学之所以成始而成終者也。
- (51) 敬者一心之主宰而万事之本根也。
- 52 如今看聖賢千言万語、大事小事、莫不本於敬。収拾得自家精神在此、 方看得道理尽。
- 53 然敬有甚物。只如畏字相似。不是塊然兀坐、耳無聞、目無見、全不省事之謂。只収斂身心、整斉純一、不恁地放縦、便是敬。
- 5) 敬、只是一箇畏字。

- 55 敬非是塊然兀坐、 耳無所聞、 目無所見、心無所思、 面後謂之敬。 只是有所畏謹、 不敢放縱。
- 56 至於用力之久、而一旦豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗無不到、 而吾心之全体大用無不明矣。

57

心与性、自有分別。霊底是心、実底是性。

るのが祭祀の感格ではなかったろうか。生命の根源は知的に理解することもできようが、やはり窮極においては、我々が敬畏を存 ては考慮すべき点があるように思われるが、示唆を受けることの大きい論説であった。 のである。妙契悟入・豁然貫通という表現がこのことを明示している。」と述べている(二八四頁)。「神秘性」という表現につい かかわらず、神秘性を残していたとすれば、 して直接それに触れることによってはじめて可能であると思われる。鬼神説における祭祀の感格が、朱子の鬼神解釈の鮮明さにも これを気の根に絞ってみたところで、やはりそこにはそういう気や鬼神の対象化が残る。こういう対象化の方向を完全に主体化す を気のはたらきとし、気の聚散生滅によってこれを理智的に理解することは鬼神をあくまで対象化して把握することであり、また るであろう。…(中略)…居敬脱然貫通妙契悟入は、鬼神説における祭祀感格の神秘性と相連なることになる。…(中略)…鬼神 おける表現と見ることができる。してみれば祭祀感格の神秘性の残留は、 友枝龍太郎氏は、前掲著の結語の中で、「父祖の祭祀感格をとおして生命の根源に触れることは、居敬脱然貫通の方法の祭祀に 太極説・格物致知説にも、 やはりいくらか神秘性を残していたと考えなくてはならぬ 理で詰める朱子の窮理の立場を補うものであったと言え